

【シンポジウム：「21世紀の近代化」を考える】

報告 I：東京スカイツリーと古代天皇制国家の形成

～「心柱」を軸にして～

イルマ・サウインドラ・ヤンティ

目 次

はじめに
東京スカイツリー
古代天皇制国家の形成
おわりに

はじめに

2012（平成 24）年、東京スカイツリーが開業した。634m というタワー（塔）として世界一の高さを誇る東京スカイツリーである。地上に建っている建築物、いわんや高層建築物は、当然のことながら地震や台風などの強風による外からの揺れに弱い。その外からの揺れを受けて倒壊するのか、それともその揺れを制御しながら存立し続けることができるのかという問題は、日本が対外的な危機を他のアジア諸国と同様に受け止めながら、倒れず、存続し続けたことと通じるものがあるように思う。そのことを深く確信するにいたったのは、地震や強風による揺れによる倒壊を防ぐために、東京スカイツリーの建造にあたって、建てられてから 1000 年以上に亘って台風や地震による倒壊を免れている法隆寺の五重塔に採用されていた「心柱」による制震構造が採用されているのを「発見」したことによる。

法隆寺の五重塔に採用された「心柱」が、地震や強風の揺れによって倒壊することから守ってくれていたのである。それは、古代天皇制国家の形成において、日本が対外的な「揺れ」を制御し、揺れによって倒壊しないような「心柱」

をその政治文化の中に組み込んだことに通じるものがあるのではないだろうか。そのことを明らかにするのが、本報告の課題である。一見、無縁に思える、東京スカイツリーと古代天皇制国家の形成過程とを取り上げることで、日本の強靱さと持続性の秘密の一端を、政治文化の視点から明らかにしたい。

東京スカイツリー

戦後の日本経済の高度成長を象徴したのは、東京タワーである。東京タワーも東京スカイツリーと同じく電波塔として建設された。しかしながら 21 世紀に入り、東京都内には 200m 超の高層建築物が立ち並ぶようになると、電波が届かない受信困難区域が発生するようになった。それだけでなくテレビ放送もデジタル化され、デジタル電波が必要となった。デジタル電波として欠かせないものが高層塔である。地上デジタル放送やワンセグ放送で使用するデジタル電波を安定的に発信する設備が必要となってきたのだ。高層の新タワー建築に積極的に関わったのが、その必要性から当然のことながらテレビ放送局である。600m を超える高層タワーを建設する必要があったのである。

地震大国日本で高層タワーを建設するには、地震対策に万全を期す必要がある。地震による倒壊から建物を守る方法は、大きく分けて三つある。

(1) 建物を頑丈にする「耐震構造」

(2) 建物と地盤を切り離して地震力が建物に伝わらないようにする「免震構造」

(3) 特殊な装置や構造上の工夫により地震による揺れを小さくする「制震構造」である。「耐震」構造にするのが一般的であったが、「制震」や「免震」構造にできる技術も最近増えていた。耐震構造の建物は命を守ってくれるが、制震構造や免震構造の建物は命だけでなく、その後の生活も守ってくれるのである。

東京スカイツリーの地震対策は、以上の「耐震構造」「免震構造」「制震構造」のうちの「制震構造」が採用された。その時に参照されたのが、奈良の法隆寺の五重塔に施されている制震構造である。法隆寺の五重塔は、日本の仏教建築を代表する木造の建築物であるが、680 年（天武 8 年）頃に建立され、世界最

古の木造建築と言われている。これまであった幾多の台風や地震を乗り越えて生き残っている建物である。その法隆寺の五重塔に採用されているのが、「心柱」による制震構造である。その心柱による制震構造を、現代的に解釈した「心柱制震」が地震対策として採用された。「心柱」というのは、高層タワーの真ん中に設置されたもので、地震や強風の揺れを吸収し、その高層タワーが倒壊しないような働きをしているのである。

古代天皇制国家の形成

東京スカイツリーからいきなり古代天皇制国家の形成について論ずるのは、かなり飛躍していることは重々承知しているが、日本の政治文化の特質を解明するためには、ここまで戻る必要がある。東京スカイツリーを倒壊させる危険があったのは、台風の強風であり、地震の揺れであったが、古代日本の独立を揺るがせる対外的な危機は、隣国中国からもたらされた。

6世紀後半の隋の勃興は、東アジア世界の危機の時代の始まりであり、隋の周辺国にとっては隋に飲み込まれる危機を意味していた。それは唐になっても変わりはなかった。隋や唐の周辺国は、外からの激しい「揺れ」によって国家倒壊の危機に瀕していたのであり、倒壊しないで独立を保てるように必死にもがいていたのである。日本が隋や唐から貪欲に学び、唐の政治制度に似た統一国家を形成しようとしたのは、つまり、大和王権による強引とも思える国家統一と天皇制国家の形成は、かかる国際政治の文脈を抜きにしては語ることができないであろう。

聖徳太子の十七条憲法であれ、冠位十二階であれ、それは、外来思想である、仏教と儒教によって作られているのである。大和王権による日本の統一は、物部氏を中心とする排仏派（神道）を、開明派で革新派ともいべき崇仏派（仏教）の蘇我氏と大和王権とが圧倒することによって果たされたのである。神道勢力、つまり、日本古来の伝統を守る勢力は、政治勢力としては駆逐されたのである。外来思想摂取に積極的だった崇仏派の蘇我氏と結んだ天皇家が、中国で勃興し

た隋や唐の文物を積極的に取り入れることで、古代国家の枠組みを作っていたのである。古代日本の文明化の推進力であった蘇我氏の抹殺、つまり、中大兄皇子と中臣鎌足が計らって蘇我入鹿を暗殺することによってなした大化の改新も、決して反動的なクーデタではなかった。開明派の蘇我氏の抹殺だから、守旧派による巻き返しのような印象を持ちやすいが、古代日本における文明化路線は継承されていく。そこで出された改新の詔においても、中国からの文物を採り入れての日本の「近代化」の歩みは止まらなかった。壬申の乱を経て、天武天皇の政治にいたるまでそうであった。

天智天皇の時代の白村江の戦いでの敗戦は、日本に衝撃を与え、大陸や朝鮮半島から切り離された「日本」を意識させた。「日本」という国名が作られたのも、防御柵としての水城が日本海側に形成され、防人として人びとが動員されるのも、この時代である。対外的な危機を前に日本人としての一体感が形成され、それが、天皇を中心とした国家統合へと向かわせる推進力となった。そう考えなければ、大和王権による強引な土地の公有化政策などが、それほどの大きな反対や抵抗を受けることなく成功を収めたことの理由の説明がつかない。

日本のすごいところは、そもそもの危機の源である隋や唐から積極的に学んでいるところである。それは、幕末明治維新の時代にも見ることができる。欧米諸列強がアジア・アフリカへの侵略してくる時代であり、ほとんどのアジア・アフリカの国々は植民地化された。その時代の空気の中で日本は尊皇攘夷を唱えていた長州や薩摩でさえもいち早く諸列強から学んでいることに通じるものである。中国文明を積極的に取り入れることで政治制度を最新のものに構築し、大和王権を中心として国家の再編をやり遂げたというのが、古代日本における天皇制国家の形成過程であろう。

おわりに

古代律令国家形成の総仕上げを行なったのは、天武天皇である。天武天皇は、国家体制を唐に負けないだけのものに編成し終えた後で、何をやったのか。こ

の国の「心柱」を作ったのである。中国が「易姓革命」の国であるのに対して、日本は「万世一系」の国である。私が研究した本居宣長も日本の美点として揚げているのが、この「万世一系」である。そのことを証拠立てるために『古事記』『日本書紀』の編纂を命じた。そして、皇祖神天照大御神が祀る神宮として、伊勢神宮を創建したのである。それは、日本の政治文化の中に「心柱」を作るという営為であった。

東京スカイツリーから始めるという、一見トリッキーな構成にしたのは、日本の政治文化の特質が、地震対策をモデルに説明すると分かりやすいと思ったからである。日本社会は、外からの揺れに対して、頑丈に護ることで倒壊を免れているのでも、揺れが伝わらないように免震構造によって護るのでもなく、揺れを上手に制御することで国としての倒壊を免れているということをはっきりさせたかったからである。それと同時に、日本という国が技術的には常に最先端のものを追い駆けていながら、実は伝統を大切に活かしていることの、典型的な例だからである。東京スカイツリーがそうであるように、日本の政治文化もそうなのだというのが私の結論である。

日本人にとって伊勢神宮は、決して過去の遺産ではなく、日本の「心柱」となるリアルなものなのである。伊勢神宮に象徴される天皇制は、日本社会の「心柱」として日本の長い歴史の中で機能してきているのだ。それがあることによって日本の政治社会は柔軟でありながらも強靱であり、持続的なのである。天皇制とそれを陰で支える伊勢神宮は、日本の政治文化の「心柱」であろう。日本の歴史における転換期や危機の時代には、常に天皇が立ち現れ、日本社会の連続性・持続性を担保しているという事が、このことの何よりの証左である。この「心柱」の存在があったがゆえに、つまり、日本は和魂が根底において保証されている安心感があるからこそ、日本という国はどんな時でも、特に危機の時代であればあるほど諸外国から貪欲に学ぶことができるのであろう。

日本の社会は、外からのどんな衝撃にも耐えることができるような頑丈に作られた耐震構造の社会ではなく、衝撃を上手に吸収しながら、つまり、先進文明を貪欲に吸収しながら、しなやかに変貌を遂げながら生き延びていく政治文

化，まさに制震構造の社会ではないかというのが，この報告の結論である。だからこそ日本は，「万世一系」の天皇制のもとで世界史の荒波をくぐり抜けて生き抜き，常に世界の先端を走り続けることができているのではないだろうか。